
トライアングル・ＬＯＶＥ

小鳩ヒナコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トライアングル・LOVE

【NZコード】

N6379D

【作者名】

小鳩ヒナコ

【あらすじ】

中学からの美貌の恋人と、高校からの成績優秀な親友が、恋仲に…。三角関係を描いた青春ラブストーリー。

プロローグ

和尚。おまえを親友にしたのが、ぼくの間違いだった。

目の前で、一機の旅客機が、だだつ広い滑走路を離陸していく。

和尚を乗せたノースウエスト航空機。
ぼくの、最高の親友だった男。

ぼくのそばに、愛子がやって来る。

「あれ？ 結花は？どこへ行つたの？」

ぼくは、その質問には答えられない。

ただぼくは、大空に向かって、ぼくら3人の青春小説の終わりを見つめていた。

第1話（和久井尚人“和尚”）

『和尚』とは、高校1年生の教室で初めて出会った。出席番号が前後だつたのだ。

先生に決められた出席番号順に座らうとするとい、前の席の長身の男がぼそつとつぶやいた。

「あれ？おれ、今年は最後じゃないんだな」

「ぼくだよ、このクラスの最後は、渡辺翔つていうんだ。よろしく」とぼくは自己紹介した。

「おれ、和久井尚人」

和久井の身長は、185cmはあるかと思われた。

彼は、モデルかと思うくらい均整の取れた身体と、彫りの深い白人系の顔立ちをしていた。

「よく外国人に間違われない？」とぼくはなれなれしく言った。

「半分はそうだよ」

「やつぱり」

「そのうち、日本かアメリカか、どっちかの国籍に決めるつもり」「で、どっちにするの？」

「うーん」

彼は、真面目な顔をして、

「“ニッポン・チャチャチャ”と“USA！”のどっちが応援のしがいがあるだろ？」

と馬鹿げた質問をしてきた。

ぼくも負けずに、

「チャチャチャに決まっているだろ？」

と出鱈目を言つてみた。

「ほう。なぜそう言える？」

「だって、USA！はただの4分音符の塊じゃないか。チャチャチ

ヤはそれになんと、16分音符が加わるんだぜ？」

「なるほど。声援の難易度がより高いというわけか」

「きみにナショナリズムが芽生えていないのは、同級生のぼくとしてはじつに遺憾だ」

ぼくは、意味もなく威儀を示してみせた。

「それで、おれをどうしようつていうの？」

「そうだな。 まず、きみの愛称を決めてやるよ。《和尚》でどうだ？」

「《和尚》？ なんだ、それは」

白人顔の和久井が、情けない表情になつた。

「和久井の和と尙人の尚をとつて、和尚。これできみも立派な日本人だ」

「ひでえなー」

「ぼくのことは、翔でいいよ」

和尚はにっこり笑い、ぼくをめがけて拳を突いた。これで、ぼくらの友人関係は成立した。

出会ったときの和尚はこんなだつたが、彼は決して人なつっこい性格ではなかつた。

気がつけば、和尚がよく行動をともにする親友といえば、ぼくぐらいなものだつた。

なにしろ、外見があまりにモデルなせいか、どこか近寄りがたい雰囲気があるらしく、とくに女子が彼を遠巻きにして見ていた。

それと、和尚は、勉強がおそらくできた。

初めての中間テストでは、2位をぶつちぎつて堂々の学年トップだった。

「和尚、おまえ、そんなに勉強できるのに、なんでこの高校に来たの？」

「この高校だつて、いいじゃないか」

「でも、ダンツすぎるよ。ラサールとか灘とか、ほかにも行くと

「ころがあつたでしょ」

「おれ、近いところがいい」

ぼくは、和尚のそんな素朴なところが気に入っていた。

しかし、じつは彼の頭脳は、もっと狡猾で計算高いものだった。

第2話（桜井結花）

「…」こんなやつがいるんだよ
と、ぼくは結花に笑いながら和尚の話をした。

結花とぼくは、中学3年生の修学旅行のときから付き合っている。彼女は、全校男子生徒の憧れの的といつてもいいくらいの美女で、はじめ、ぼくが交際を申し込んだときには「がもう来るとは思つていなかつた。

ぼくは、彼女に、京都の和紙でつくりた小さな人形をあげた。
結花は、恥ずかしそうに「うれしい。ありがと」と言って、大きな瞳をぼくに向けた。

ぼくが、ほんとうに結花に惚れたのは、その瞬間だつたかも知れない。

彼女は、のちに、ぼくの申し込みをOKしてくれたのは、「優しそうな人だつたから」と教えてくれた。

ぼくは、自分が優しいと思つたことは一度もなかつたので、その言葉には不思議な気がした。

とにかく、こんな美女を自分の手中におさめておけることは、ぼくの男としての最大の勲章だつた。

「わたしにも友だちできたのよ。愛子つていつの

「へえ。どんな子?」

「えつとね。すごく頼りになるしつかりした子

「ははあ。女子高だと、バレンタインデーに女子からチョコをもらつたりするタイプだな」

結花はぐくすくと無邪気に笑つた。

「そうそう、そんな感じ。きっとあの子、バレンタインデーにチョコもらつと思つ」

結花の通りになつた高校は、いわゆるお嬢様の集まる女子高

だつた。

ぼくは、彼女が、いろんな男子生徒の目に触れるチャンスが少ないことに、少し安心していた。

「高校1年の目標はー」

結花は、桜の舞い落ちる公園のすべり台から降りてみせた。あーあ。また、ジーンズの後ろを汚して。

「翔ちゃんどずっと仲良くなられることー！」

「それなら大丈夫。ぼくは浮気な男じゃないからね」

「ふふふ。じゃ、翔ちゃんの目標は？」

ぼくのあたまにぱっとひらめいたのは、ただ一つ　それは、結花と絶対やつてやる！ということだった。

ぼくらは、まだたまに軽いキスをする程度だつた。こんなので、男子高校生が納得するわけないだろ。

でもぼくは、

「ぼくの目標は、パイロットになることだよ」と平然と嘘をついた。

「ずいぶん、派手ねー。だいいちそれ、高校生活の目標じゃないし」「一日一日が未来をつくるんだよ。だから、今年も来年も再来年も、ぼくの目標はパイロットになること」

そんな話をしても、夕暮れになるとちょっと手を握つて別れた。

結花が、まっすぐな髪をひるがえして、盛大なバイバイをしていく。ぼくは、にっこりと彼女を見送つて、平和なデートをしめくくる。

「あーあ…それにしても

ぼくは、ため息まじりに帰り道を歩いた。

「結花と一緒になるのは、いつのことなんだら？」「..」

それは、遠い遠い未来のような気がしてならなかつた。

そのときのぼくは、少女が急速に脱皮するときのことを、まったく

く知らなかつたから。

第3話（和尚の経験）

「なあ。『じつ思つて、和尚』ぼくらは、ある夏の始まりの午後、サンドイッチを食べながら窓際で日向ぼっこしていた。

「じつひて。セックスのやり方くらい、自分で覚えろよ」

和尚は、ジイドの『狭き門』を読みながら言つた。彼の物語には、いつも簡潔明瞭で素早かつた。

「いや、聞きたいのは、じつせつたら彼女をそのままにやられるかで」

「そりや、彼女しだいだろ」

「聞くけど、おまえ、したことあんの？」

「あれ」

「どこで？」

「隣の家だよ」

「隣の家？？誰と？！」

「5歳年上の大学生のお姉さんと。西瓜切つてあげるから部屋においてって呼ばれたんだ」

「うはー西瓜で買われたのかよ」

「1年間くらい続いてたかな。いい勉強になつたよ」

「おまえ、…尊敬するぞ」

「でも、おれは自分からはなにもしていない。だから、ほんとうのことを言つと、翔にするアドバイスはないんだよ」

ぼくは、和尚にそう言われて弱つてしまつた。

仕方ない、これはチャンスを待つしかないなとモヤモヤを抱えつつ、次の授業の準備を始めると、いつそり和尚がそれをやいた。

「よかつたら、おれの部屋使えよ」

「え？」

「おれ、離れに一人寂しく住んでるから。こぞ『トヒコツ』とあせ、
おれ、母屋の方に行くよ」

「…恩に着る」

と言つたものの、ぼくにはその実行力があるとは、到底思えなかつた。

ぼくは、ぼくにもレクチャーしてくれるお姉さんがいないものか
と、ふと考へて、首を横に振つた。

後ろから見る、和尚の背中は大きかった。これが、やつたことのある男の深みつてやつなのか？

ぼくの背中はどうだらう。結花の身体を、守つてやる」ことが出来るだらうか。
ぼくは、まだまだ子供もだつた。和尚と比べると、自分がとても小さく見えた。

第4話（7月の海へ）

「ねえ翔ちゃん。翔ちゃんの高校の文化祭、招待して？
7月のなかば、結花がこんなことを言つてきた。

「もちろん、そのつもりだけど、どうして？」

「愛子が友だち募集中なの。うちは女子高でしょ。それでけつこういろいろと大変なの」

「ははあ。彼氏探しか。うちの高校、いいのいないぞ？」

「でも、和尚さんにも彼女いないんでしょ？」

「あいつか、あいつはな…」

和尚には、正直言つて、たくさんのラブコールが届いていた。
でかくて強い身体に学力優秀とあれば、順当に考えて、よりよい
子孫を残そうとする女性が多く集まる」ことだろう。
ぼくは、なんで自分のような男に結花がついてきてくれるのか、
この頃、よくわからなくなることがあった。

「優しいからいい」とて言つけれど、ぼく程度の男なら、結花の
美貌ならいくらでもつかまえられるだろう。

「でも、ちょっと時期が早すぎるな。文化祭は9月だからな
「え」。愛子が和尚さんに会いたいって言つてるのにな」

「結局、和尚狙いかよ。あいつは難しいぞ」

「ねえ、文化祭のまえに、4人でどこかへ行けないかな？」

「仕方ないな」

「ぼくは、結花の友だち思いに付き合つてやることにした。

「でも、繰り返し言つけど、和尚は固いぞ」

だが、和尚に話を持ちかけると、彼は意外と乗ってきた。

「海なんかいいね。おれ、太陽大好き」

こうじて、ぼくらは、電車に乗って、海水浴へ行くことにした。

「はじめましてー」

と活発そうな、賢そうな、短髪の女の子が、挨拶する。

「この子が愛子か。

ぼくらは、お互に自己紹介をし合つたあとで、男女に分かれて車内でおしゃべりしていた。

海に着くと、さっそくぼくらは水着に着替えて、まずは波打ち際ではしゃいだ。

「わたし、沖へいくわ」と愛子が言つ。

「いいね。おれも」と和尚が続く。

「あいつら、けっこういい感じじゃないのー」

とぼくは、波に乗つてすいすい泳いでいく一人を見ながら、結花を振り返つた。

「う…うん。そうだね」

結花は、なぜか硬直していた。

「どうしたの?」

「うん…なんか、わたし、和尚さんつて苦手かも」「え?」

「なんか、あの人怖い…。なんでだろ?」

「なんで?いいやつだよ。頭が回りすぎる嫌いはあるけど」

「ううん。そういうのじゃなくて…なんか…身体も大きいし…」

結花は、あたまが混乱しているようだつた。

ぼくは、彼女を休ませるために、波打ち際から上がり、砂の上に二人で寝そべつた。暑い砂が気持ちいい。

「どう?ちょっと気分はましになつた?」

「うん。大丈夫。わたし、なんか変ね。熱があるのかな」

「まじで？」

「ぼくは、結花の額に手をあててみたが、すでに温められた手で、体温が測れるはずもなかつた。それをしてたのは、たんに、ぼくが彼女に触れたかつたからだ。」

「なにか、飲み物を買ってきてやるよ。なにがいい？」

「じゃ、…冷たいオレンジジュースかなんか、いい？」

「おつけ」

「ぼくは、立ち上がって、バカみたいに値段の高いオレンジジュースを買いに、海の家へ歩いていった。」

そのあいだ、結花はじつと身じろぎもせず、波間を見つめていた。

「ただいまー」と、和尚と愛子が、明るい笑顔で帰ってきた。

「和尚、泳ぐの上手いね～」

「おれ、サンフランシスコ生まれなのよ」

「なんだ。じゃあ、音楽聴きながらローラースケート履いてたわけね」

「そう、ロツクンロールを聴きながらね

「何年代の人なのよ、それ」

彼らは、冗談を言つて笑いあつていた。ぼくも、つられて笑つていた。

でも、ぼくはなにか空氣の異変を感じていた。それは、結花の様子がおかしかつたからだった。

夕焼けとともに、ぼくらは海をあとにし、電車に再び乗つた。

和尚と愛子は、相変わらず、くだらない冗談を続けていた。和尚にしては、それは珍しかつた。ぼくは、こんなに昂揚した和尚を見るのは初めてだつた。

「愛子のこと、気に入つたのかな…」

ふと、ぼくの横にいる結花を見ると、彼女の視線は和尚に釘付けになつていた。

ぼくは、なんだか少し、嫌な予感がした。和尚は、柄にもなくバ
力騒ぎを繰り広げている。

ぼくは、彼の冗談が、愛子を楽しませるものではなく、なにかか
ら逃げ出すために行つている作業だという気がした。

それは、どうにも拭い去れない直感のようなものだつた。

でも、ぼくは、その気持ちに蓋をして、結花の肩をそつと抱いた。

第5話（結花の変化）

海から戻ると、夏休みが待っていた。
ぼくと結花は、あちこちテートした。それこそ、近所の盆踊りから水族館なんかまで。

「ねえ、この頃、あんまり手をつながないね」
ある日、ぼくは街の雑踏のなかで結花に言った。

「え？ そうかなあ？ ……翔ちゃんの思い過」しだよ

「じゃ、つなげよ」

ぼくらは、いつものように手をつないだが、ビリとなくぼくは、
きこひなさを覚えた。

まるで、結花は、その手にのみ神経を集中して、身体をこわばら
せていくようだつた。

こんなことは、今までなかつた。

ぼくはそつと結花を盗み見た。彼女は、最近、見違えるほど美しくなつていた。

まえから美少女だと周りから言われてきたけれど、いまは幼さがぬけて、一片のもうさを秘めた思春期の美しい女性になつていて。もう、結花は、すべり台から降りて、ジーンズを汚したりしない。ぼくは、彼女の内部で、なにか変化が起つたのを悟つた。

ぼくは、ふと和尚の存在を思い出した。結花は和尚のこと、「怖い」と言つた。

でも、それはたんに、彼女が今まで成熟した大きな男性の身体を意識したことがなかつたからじゃないのか？

ぼくは、自分の発想に、ぎょっとした。

そうだとすれば、ぼくはこままで結花に、男として見られてなか

つたといふことになるじゃないか。

こんな大事なことを、ぼくはふと放置しておくれにはいかなかつた。

駅の改札を出たとき、ぼくはふとした瞬間を盗んで、結花にキスしようとした。

でも、彼女はぼくの動作をすつとかわして、何気ない調子で歩き続けた。

決定だ

ぼくは予期せず、自分の勘が当たつたことに、がくせんとした。

結花は、和尚に恋をし始めている。

間違いない。

「おー、どうした?」

和尚の長い脚に蹴られて、ぼくははつとした。ホームルームの時間だった。ぼくは、議長から、名指しで意見を求められていた。

「はいっ…」

ぼくは、あわてて返事した。周りが、じりと騒ぐ。

「え? なにこれ

「聞いてなかつたの、翔? 文化祭でやる題目だよ、
「なに?」

「おまえ、いま、ミスコンに賛成したの。あんまり決まらないから、次のやつの意見にみんな従おうってことになつてたんだよ」

「えー? …ぼく、やだよ。ミスコンなんて」

「でももう決まりだな。ほかのやつらも、そつぞと面倒はさせたいのさ」

あつとこつ間にホームルームは終了して、各自解散となつていた。

中間テストが近いので、ほとんどが帰宅の準備をしてくる。

ざわざわと人の声と足音が混ざる教室で、和尚だけは身動きもせず、じっとぼくを見ていた。

彼の視線ビームはX線仕様で、人がびっくりするほど的確に、物事の骨格をとらえることが出来た。

「なにを悩んでる？」と和尚が口を開いた。

「ぼくが？いつものことだよ。これでも、青春の1ページを読んだる男のコなんだから」

「2ページ目をめくつてみると、そこになにかが書いてあったとうわけか」

ぼくは、和尚をちらりと見た。

それが和尚、おまえへのライバル意識だなんて、ぼくに言えるわけないだろう。

「和尚。それより、ミスコンだぜ？あらゆる美女が集まつてくる。おまえにどれかいいのを、ぼくがあてがつてやるよ」

「おれはいいよ。自分で選ぶ」

「ほう」

「もしかしたら、優勝した子に無条件でアプローチかけるかも知れない」

「えっ？一恋愛感情なしで？？」

「もちろん、なしで」

「おまえらしくないな、和尚」

「じつにおれらしくないと思うけどな」

和尚は、淡々とした口調で語つた。

「おれはね、おまえみたいにこころの暖かい人間じゃないんだ」「信じられないな

「おまえのことが、ときどき羨ましいよ」

「なら、そんな変な告白するなよ」

和尚はそのとき、自分を少し哀れむかのように言った。

「おれもね、年相応の経験値は積んでおきたいの。ほんとの恋愛をしたときのためにね」

ほんとの恋愛。その予感のする相手は、和尚、おまえにとつて誰なんだ？

ぼくは、海へ行つたときの、和尚の奇妙なはしゃぎぶりを思い出した。あれ以来、彼のあんな姿はまだ見ていない。

ぼくは、ぼくなりのレーザービームを、和尚に向けて発射した。「おまえの愛子ちゃんって、どうなのよ。和尚、やたらと気が合つてたじやん」

「ああ。あいつか。面白いな、彼女」

「彼女にはアプローチしないの？」

「するわけないだろ。あいつ、おまえは男だよ」

「なに」

「夏休みは男連中とツーリングだつてさ。彼女が欲しいのは男友だちだよ。ぼくはその一人に認定された」

「そりなのかな…」

少なからず、ぼくは落胆した。

愛子は、和尚の恋愛対象になり得なかつたのだ。

第6話（文化祭）

やがて9月がきて、文化祭の季節を迎えた。

結花は、この頃、やたらそわそわしていた。長く伸びた髪を綺麗にそろえて、旦元と唇に少し化粧もするようになった。

「周りの友だちが、いつもした方がいいって言つたよ」と結花は説明した。

ぼくは、どんどん艶やかに変わっていく結花を見て、とまじついた。

ぼくは、こんなに素晴らしい美貌な女の子と付き合つてきた自分を、いまさらのように奇跡に感じた。

「ミスコンテストの人数が足らないんだ」

と、文化委員から告げられたのは、文化祭直前のことだった。

「案外、エントリー者が少なくてな。他校からも応募を受け付けることにした」

「それで、ぼくにどうしての？」

ぼくは、文化委員の男に尋ねた。

「誰か綺麗な女の子、探してきてくれないか。おまえ、女子高の彼女がいるんだろ？」

「べつにそんなに無理しなくても。たかが、文化祭だ」

「ところがちょっと、違うんだ」

文化委員は熱心に言った。

「じつは、おれの兄貴が雑誌社に勤めててさ。こんど、ミスコン覇者の特集を組むらしいんだ。…つまくいって、グラビアアイドルへの道だぜ？」

「そんなのぼくらに関係ないじゃん」

「大ありだよ！だって、もしうちの学校からアイドルが出たりどうする？おれら、アイドルとお友だちだぜ？！」

アイドルタレント好きな文化委員は、野望を抱いていた。ぼくは、あきらめて、結花に電話して、適当な子を選んで連れてきてくれないかと頼んだ。

そして、結局、選ばれてきたのが結花だつた。

「なにがなんだかわからんの。とにかく、みんなが出来りつて言つから」

「ぼくは、あたまを抱えた。これでは、ぼくの大切な宝を、みんなの目前に防犯装置もなしにさらけ出すようなものじゃないか。

「いまからでも、変更きかないの？」

「駄目みたい。それに…、わたしなんだか興味あるし」

結花から、そんな言葉が出るのは驚きだつた。彼女は、こんなに積極的な女の子だつただろうか。

なんだか、ぼくはだんだん、彼女のことを、知らない女の子を見ているような気分がしてきた。

文化祭当日のその時間、ぼくはほとんどやけっぱちになつていた。

「24番、桜井結花さん」とアナウンスが流れる。

「ほおー……」

…グラウンドから、大きなため息が洩れた。結花の水着姿だ。夏の海でも見たはずだったが、彼女は、いちだんとメリハリのある女らしい体型になつていた。

なんと、少女が大人の女性になるスピードは速いのだろう。

太陽のもとで健康的に焼けた肌が、結花の白い歯と輝く目をさらに引き立てていた。

ぼくは、結花が多くの人まえで笑顔をつくつているのを、とてもじやないが落ち着いて見ていられなかつた。

「おい、和尚…」

ぼくは、隣で見ていた和尚に、D組のソバでも食いに行こうぜ、
と声をかけようとした。

だが、和尚は、そんなぼくの方を見向きもしなかった。
彼は、ただじっと、壇上の結花を見つめて立ちつくしていた。
ぼくは、そんなに無防備な、なにかにとりつかれたような和尚を
見るのは、初めてだつた。

第7話（ぼくの謀略）

やがて、季節は冬に突入した。

文化祭で開催されたミスコンテストには、見事、結花がグラんプリに選ばれた。

ぼくは、グラんプリの恋人ということで、周りからずいぶん冷やかされたり、羨ましがれたり、妬まれたりした。

しかも、結花は文化委員が言ったとおり、雑誌社から取材の申し込みが入り、グラビアアイドルの仕事をしてみないかという正式なスカウトを受けていた。しかしそれには、結花の両親が難色を示し、一時保留となつていた。

「アイドルになりたい？」とある日、ぼくは結花に聞いてみた。

「そうだなあ。憧れもあるけど…。でも、ああいうお仕事始めたら、恋愛出来ないんでしょ？」

「かも知れないね」

「わたし、そんなの嫌だし」

結花は、ぼくにつこりと笑いかけた。

でも、その言葉とその笑みは、ほんとうにぼくに向けられて発信されているのだろうか？

ぼくはこの頃、結花に対して、素直に向き合はずにいる自分に気がついていた。

和尚は和尚で、じじいじじにあらすといつた感じだった。

「おまえ、最近、冷たくないか？」

ぼくは、教室の古い電気ストーブで手を温めながら言った。

「そうか？ 悪いな」

和尚は、机の上に何冊かの分厚い本をひろげて、熱心になにか英語を書いていた。

「悪くはないけど。なんかぼくに隠し事してない？」

「してゐよ」と和尚はあつさつと言つた。

「なに? 聞き捨てならないな」

「進路のこと」

「え? ?」

「もう1年も終わりだからな。来年からは本格的に勉強しないと
……つておい。おまえ、東大行くんじゃないの?」

「行かない

「なに?」

「ハーバードにしようかと思つてる」

「はあああ? ?」

「世界で最高のランクだと思つ

「そのあと、付け足しのよう」、「おれの母親の母校でもあるんだ
よ」と和尚は言つた。

「さあ、これで隠し事はないよ」

「ぼくの呆気に取られた表情をよそ」、和尚は本の山々を広げ始めた。

「かえろつか。ラーメンでも食つ?」

(こいつは、自分の気持ちを隠し通す氣だ)とぼくは思つた。

だが、それは和尚の試合放棄のサインでもあつた。

和尚がアメリカに進学するとすれば、たとえ一人が惹かれあって
いても、いずれすぐに離ればなれになる。

彼の性格からみて、ぼくは彼が、そんな実りのない恋を育てるとは
は考えられなかつた。

おそらく、一時的に結花に気を取られたとしても、すぐに体勢を
立て直して、何食わぬ顔で学年トップを歩き、ひたすら前を目指し
ていく　　実際彼は、そんな男だつた。

だから、ぼくは、いま、結花と和尚のあいだに芽生えかけている
恋を、どうしても摘み取らなければならぬと思つた。

「おこ、こつかの話だけど」

「ぼくは和尚に交渉を持ちかけた。

「なんだ？」

豚骨ラーメンの熱いのをずるずるいわせながら、和尚が生返事した。

「おまえんち、ぼくと結花との『テート』のとき使わせてくれるって話、あつたじやない。あれ、まだ有効？」

「ああ。やつとその気になつたか。いつだ？」

「まだわからないけど、近いうち」

「いいよ」

和尚はよどみなく言って、自分の離れのカギをくれた。

「マスターキー持つてるから。落とすなよ」

あまりのあっけなさに、ぼくは拍子抜けした。

ぼくは、この際、一気に結花を自分のものにしようと決心していった。問題は、結花をどう呼び出すかだった。

考えたあげく、ぼくは、和尚と一緒に3人で試験勉強しようとう話を、彼女に持ちかけた。

「あいつ、なんでも教えてくれるぜ。あたま無茶苦茶いいから

「… そうなの？ 和尚の勉強の邪魔にならないかな」

「いいの。ミスグラランプリには、誰にでも無条件で勉強教えますって、学級委員に誓わされてたんだから」

大嘘もいいところだった。だが、結花はそれで納得した様子だった。ぼくは、和尚にすまん、といこうのなかで手を合わせた。

決行日は、からりと晴れた暖かい冬の日だった。

でもぼくは、冬のプールから上がってきたばかりの間抜けな犬みたいにブルブル震えて、ものすごく緊張していた。

「え？ 和尚、いないの？」

結花は、部屋の座布団の上に座ったまま、愕然としていた。

「うん。なんか急用で、外に出たらしい。帰つてくるの、夕方になるから勝手にしててくれってさ」

ぼくは、ケータイをぱちんと閉じた。すべて、予定通りだ。
「そんなん。じゃあ、来た意味ないじゃない」
「そんなこと言わないでよ。ぼくだって、きみを教えることくらい出来ますよ」

「でも。和尚が教えてくれるからつて來たのに」

「二人で一緒に勉強するのもいいんじゃない?」

「…なんだか変。翔ちゃん、和尚になにか言ったの?」

結花の顔つきが、急に険しくなつた。

「なにも言つわけないでしょ」

「じゃ、どうして? 和尚は、約束を破つたりする人じゃないと思う」「ちよつと

結花のあまりのしつこさに、ぼくは少し腹が立つてきた。

「きみの彼氏は、誰なの?」

「…え? …」

「ぼくのはずじや、なかつたの?」

「どうして? 翔ちゃん…そんなこと」

「結花、きみね。最近、ぼくのこと避けてるでしょ」

「そんなことないよ…」

「じゃなんで? 手を握るのもキスするのも駄目なの? ?」

「翔ちゃん、優しくない」

「ぼくだつてね、男なのよ?」

ぼくは、結花に強引に口づけた。

結花が、こわい、と泣き始めた。その美しい大きな瞳をにじませて。

でも、この艶やかな彼女をつぶしたのは、ぼくじゃないんだ。

「和尚!」

結花の声を聞いたとき、ぼくはほっと息を止めた。そして、彼女の身体から離れた。

結花は、ずっと泣いていた。

ぼくは……、敗北感でいっぱいだった。

「和尚はね……。ほんとは、ミスグランプリの女の子なら、誰とでも付き合いつつ言つた男だよ」

「…………」

「それからね。そのうちアメリカへ行つたりやつ男だよ

「…………」

「…………」

ぼくがそれだけ言つて、離れの部屋を出ると、門のあたりで、和尚がばつの悪そうな顔をして立つっていた。

ぼくは、下を向いて、彼のそばを無言で通り過ぎた。

やつに、ぬかりはない。ちゃんと、結花が傷つかないように見張つていたのだ。

第8話（和尚と結花の恋・1）

その後、和尚と結花が、どうやって結びついていったかは知らない。

おそらく、あの出来事のあと、おずおずと和尚が離れの部屋へ行って、結花の様子をうかがう。結花は和尚に泣きながら抱きつく。和尚は結花を抱いて優しくなぐさめる。1カツブルの出来上がり。

まあ、こんなところだろうと、ぼくは勝手な想像し、自分の愚弄さに吐き気がしていた。

2年生になつて、和尚とはクラスが別々になつた。

ぼくは、登下校の電車の中や駅の周辺で、一人が仲よく歩いているのを見かけた。

背の高い白人顔の秀才・和尚と、グラビアアイドルぱりの美少女・結花は、誰の目も引くゴールデンカップブルだった。

和尚とは廊下ですれ違つたときに、目でよつと会図する程度の距離感だつた。

和尚はぼくになにか言いたげな目をしていたが、ぼくは彼とは、とりあえずいまは話したくなかった。いつも連れ添つていた親友が、急にいなくなるのは、それは寂しかつた。

だが、和尚もやがて一人に飽きたのか、バスケット部に混ざつてバスケをしている彼の姿を見かけるようになつた。

そうしたら、たちまちレギュラーになつて、弱小チームを県大会まで導いたというから驚きだ。

あいつは、ほんとうに、なんでも出来るバケモノだつた。

ぼくが将来旅客機のパイロットをしているとすれば、和尚はNASAで宇宙飛行士をしているんじゃないかといつぶらいの差はあつた。

夏休みが始まろうかという7月のある日、ぼくは、クラスの仲間と放課後騒いでいて、少し帰りが遅くなつたことがあつた。

夕日が落ちて、暗闇が迫ろうとしている夜のターミナル駅の近くで、ぼくは大型書店から出てきたところを、ぱつたりと愛子と鉢合わせた。

「あれえ？ 翔ちゃん？ ひさしふりー」

愛子は、少し呂律がまわつていなかつた。

「愛子？？ もしかして、酒飲んでるの？」

「そーよー。ヤケ酒。バイク仲間の彼氏にふられちゃつたー」

「愛子つて、酒飲んだりするんだ？」

「家で飲んできただから、かまわないじゃない？ ちょっと、口直しにドーナツでも食べようよ」

そう言つた愛子に連れられて、ぼくは彼女と駅前のドーナツ屋に入ることになつた。

「結花と別れてから、どうしてんの？」

愛子は、少し酔つているせいか、いきなりズバッとぼくの核心を突いてきた。

「べつに、ふつうの高校生活を送つてるよ。バケモノの和尚と一緒にいたときより、ずっとふつうな感じだな」

「ふーん。和尚つて、そんなにバケモノなんだ」

「なにしろ、志望大学がハーバードだからね」

「それもそうねー。あ。それで結花の方はねー」

ぼくは結花、のなまえにドキッとした。

愛子は、グレープフルーツジュースの氷をからんといさせて、美味しそうにそれを飲んだ。

「幸せだつて言つてるけど、寂しそう。和尚、結花との交際は高校までつて宣言してゐらしいよ」

「えええーー！？ それは、冷たい話だな…」

「でしょー？ わたしもそう思う。あと一年半しかないなんて」

ぼくは、結花のことが心配でたまらなかつた。和尚に、彼女を託したことは、正解だつたんだろうか…。

「まつ。そのときは、翔ちゃんがまた結花を支えてやればいいじゃん。結花、号泣すると思うけど、頼んだよ」

「そんなことを言われても…」

「翔ちゃん、まだ結花のこと好きでしょ？」

ぼくは、コーヒーを飲んで黙秘した。

「和尚と仲直りできてないもんね。まあ、すぐには無理だよね」

愛子は、勝手に話を決めつけて、あとは別れた彼氏の悪口大会をした。

ぼくは、苦笑いで彼女の話を聞いてやりながらも、あたまは結花のことでいっぱいだつた。

「いつか、ぼくの手に結花が戻つてくることがあるんだろうか…」

愛子との別れ際、ぼくらはハイタッチをした。

「えへへー。失恋組同士、仲よくなつて」とこれからもよろしくね！」

ぼくは酔っ払いの愛子に手を振つて、それから一人歩道橋を渡つていつた。

すっかり暗闇になつてしまつた空を見上げながら歩くと、チカチカ光る飛行機がゆっくり横切つていくのが見えた。

ぼくは、パイロットになる夢は捨てていなかつた。それにはまず、大学だ。

和尚、ぼくだって、いつまでも負けてやしない。結花になにかあれば、ぼくが許さない。

ぼくは、自分が一人の男として、強くなつていくことを決意した。

第9話（和尚と結花の恋・2）

夏休みになると、ぼくは予備校通いを始めた。夏休み限定の短期コースだ。

「他校のやつらと勝負するのは、いい刺激になるな」
ぼくは、学校で同じクラスの矢野に言った。

「そうだな。でもさすがに、おれらの高校の『土星人』レベルのやつはいないな」

その頃、和尚は、新しいクラスのなかで『土星人』と呼ばれていた。勉強からスポーツまで、すべて人間離れしているという意味だ。
「あれはバケモノだから、ほつとけばいい」
「土星人、予備校通いしないのかなー」

「家庭教師がついてるって噂だけぞ」

「だろうな。日本の大学とは試験内容が違うもんな
まあ、遊んでる暇はどっちにしろ、ないだろ」

そんなことを言いながらも、ぼくと矢野は授業のあとで、ちょっと祭りをのぞいていこうぜと、にぎやかな太鼓の音がする小さな寺の境内の方へ歩いていった。

たくさんの中の屋台のなかで、浴衣姿の女の子たちがはしゃいでいるのが目にとまる。

「いいよなー」と言いながら、男一人のぼくらは、勉強疲れのあたまをさわやかな女の子の浴衣姿で癒していた。

突然、花火がパンと上がる。わあっと、人々が声を上げる。
ぼくは、ぼんやり花火の連発を見ていた。

そのとき、ぼくはふと、花火は綺麗だけれど、すぐに消え落ちてしまう、なにかはないものだと思った。

「おい、…あれ、土星人じゃないか?」と突然、矢野がぼくにささ

やいた。

「え？」

見ると、ぼくらの右手の少し向こに、浴衣姿の和尚と結花が並んでいた。

パンと花火が上ると、手前に立つ結花の顔が明るく染まる。その横顔が、あまりに美しくはかなげで、ぼくは思わず息をのんだ。

和尚はそのかたわらで、うつろな表情で閃光を見ている。

ぼくは、彼ら二人が見ているものは、ほんとうに花火なのか？
という考えが頭に浮かんだ。

もしかしたら、彼らが見ているものは、自分たちの未来じゃないだろうか？

彼らは、かげろうの命のよひに短く、終わりの近い恋を生きている。

「あいつ、余裕だなー」と矢野が和尚のことをびっくりして言った。
「海王星人だからな」とぼくは適当に相槌を打った。

「そつか。すでに土星の距離じゃないな」

矢野は、へんに理解して、じゃ帰るか？とぼくにつながした。
ぼくは、人ごみにまぎれながら、彼らを振り返りつつその場を離れていった。

でもいま、ぼくが彼らに出来ることは、なにもなかつた。

夏休みの終わりころ、愛子がフィットネスクラブの割引チケットを持ってきた。

「ぼく、勉強で忙しいんだけどな。これでも

「なに言つてんの」と愛子は一喝した。

「カラダ、鍛えなきゃ。パイロットなんかになれないぞー」

それもそうだった。

和尚がバスケに打ち込んだりしているのも、ハーバード大学では勉強だけが出来ても合格出来ないとこころにあるんじゃないかと、ぼくは思つていた。

「 よつす！」

フィットネスクラブのプールに現れた愛子は、もつすっかり失恋から立ち直つていたので、ぼくはびっくりした。

「 愛子、元気だな。安心したよ」

「 ふふふ」

愛子は自信満々の笑みを浮べながら言つた。

「 わたしは将来、新聞記者になるの。小さなことでは、へこたれな
いわよ」

ぼくは愛子につきあつて、25mプールを100回くらごターン
させられた。

「 あはは、ここのくらい余裕よ！」

「 でも、ぼくはちょっと休みたいよ。テッキチヨアの方に行かない
？」

「 仕方ないな。じゃ、上がりますかっ」

ぼくらは、ざぶつと水から上がって、プールサイドのテッキチヨ
アツツを占領した。

ぼくと愛子のこんな明るい関係からすれば、和尚と結花のゆらぐ
切ない感じはなんなのだろう。

ぼくはふと、人と人との永くつきあうには、恋人同士にならない
ことがいちばんなんじやないかなと思った。

そのことを愛子に話すと、愛子もそうかもね、と相槌を打ちつつ、
でも結婚するつて手もあるよ、とつけ加えた。

「 和尚と結花だって、恋人同士でなきや辛い思いをしなくてすむの
にね」

「 結花、やっぱり辛いの？」

「そりや楽ではないよね

「やっぱりか…」

ぼくの胸が、ちくんと痛んだ。

「正直言つてね、わたしは結花には翔ちゃんの方が合っていると思つ。

和尚と結花の恋には未来がないよ」

「それでも、燃え尽きたい恋つてあるんだうつな…」

ぼくは花火を思い出して言つた。

「じつくり、時間をかけてわかりあえる恋つてこのもあるんじやない？」

「そういうの、ぼくらの歳じゃまだ早いような気がする」

「かも知れないけど。そのうち、翔ちゃんと結花にもそういう時期が来るかも知れないから、じこの準備しておくれ」とね

「なんだか、意味深な言葉だな」

「深く考えない。運命は、待つていろと力を懇求する」ともあるのよ」

ぞふんと愛子がまた水のなかに入つていった。

あいつ、哲学者だなと感心するとともに、「……のは男だよ」とまえに和尚が愛子のことを探して言つた言葉を、ぼくは思い出していた。

第10話（結花の妊娠）

それは、突然のメールから始まった。

夏休みが終わり、秋が深まって涼しい風がそよぎ始めたころ、「翔ちゃん、会って話がしたいの」と、結花からの連絡がやって来たのだ。

ぼくは腰がぬけるかと思うくらい、びっくりした。いつたい、なにが起こったんだ？！

指定された駅前のドーナツ屋 愛子とおしゃべりした場所だに行くと、久しぶりに見る結花は、肩を落として、しおれた花のようになっていた。

ぼくは、なにが始まるのかとドキドキしながら、「久しぶりだね」と声をかけて、結花のまえに座った。

「愛子から、もう聞いてる？」

結花はぼくが座つてから、やっと重そうな口を開いた。

「え。なにを？」

「わたしが、妊娠したこと

「えつ……！」

ぼくは、これまでにないくらいの驚きで、身動き出来なくなつた。

妊娠、妊娠つて……？！和尚の子だよな？

あいつ、なんてことしたんだよ？！

ぼくは、混乱して、言葉が出なかつた。

「翔ちゃんにとつては、こんな話、迷惑なだけだと思つけど」

ぼくは、そんなことはない、といつぶつに熱心な田をして首を小さく振つた。

「わたしは産みたいの。でも、和尚が駄目だつて」

「……結花……」

「あの人には、大きな夢があるかい」「うん……」

「あとの人の未来に、わたしあいない」

結花は、急に、苦しそうに顔をゆがめて涙をポタポタとこぼした。ぼくは急いで、テーブルの上の紙ナップキンを引き抜いて、彼女に渡した。

彼女は、紙ナップキンを使いながら言った。

「たぶん、彼にとつては」

結花の声は、嗚咽を殺してのどぎれどぎれだった。

「わたしは……ただの通りすがりの女の子」

「そんなこと、ないよ！」

ぼくは、和尚の、初めて結花に目覚めたときの彼らしくない無防備な表情、そして、ぼくへの気づかいから勉強に打ち込んで彼女を忘れようとしていたことなんかを思い起こして、強く言った。

「和尚は、真剣に、結花のことを愛してるよ」

「うん……、ありがと。翔ちゃん」

結花は、紙ナップキンを使いながら、真っ赤な目でぼくを見た。

「やつぱり、翔ちゃんは優しい」

「ぼくは優しくなんかないけど、」

ぼくは、彼女をなぐさめようと必死だった。結花の泣き顔を見てみると、ぼくも涙が出てきそうだった。

「いつだって、結花のことを応援してるから。ぼくはこつでも、結花のところに駆けつけるから」

「……うん。ありがと……ほんとうに。頼りにしてる」

やがて結花は、泣き顔をおさめると、ぼくに「また連絡してもいい？」と尋ねてきた。

ぼくは、もちろんOKだつた。

結花とドーナツ屋で別れたあと、ぼくは、今度は和尚への腹立ちでいきりたつっていた。

あいつを、思い切り一発殴ってやること、もう絶対に気がすまない。

歩道橋を歩きながら、ぼくはあいつに電話した。

「和尚。話がある」

和尚は、ぼくの怒りにふるえる声をものとせず、「こいつの簡潔な口調で言った。

「いまから家庭教師が来るんだ。明日にしてくれないか」「ぼくは、和尚の冷静さが許しがたくて、通行人が振り向くほど声を荒げて言った。

「ばかやろう！…なにが家庭教師だ…おまえ、そんなことやってる場合じゃないだろ…！」

「翔らしくないな。そんなに興奮して、話ができるのか？」

和尚は、淡々とぼくを受け流した。

「ぼくは、ふつうの男だからな…！」

ぼくの目から、涙が出てきた。

「ぼくがおまえなら、結花をもつと大切にする…いつも、彼女のそばにいてやる…ずっとずっと、離れたりなんかしない…！」

和尚はずっと黙っていた。

「おまえに結花をやるんじゃなかつたよ…！」

「まで。翔」

そこで、プリンと電話が切れた。

ぼくは、自分のケータイの電源が切れていることに気がついた。

…その夜、ぼくは眠れなかつた。

結花のこころの痛みが、ぼくのこころに伝染していた。

結花…。それでも、和尚が好きなのか。あんな、冷たいやつでも。

第1-1話（和尚の決断）

翌日、ぼくは、1時間目が始まる「ついで」といって、廊下で和尚にばつたり出会ってしまった。

「やめろ……」

気がついたら、ぼくは和尚に馬乗りになっていて、周りのやつらに腕をつかまれていた。

和尚は、口の端から血を流していた。

やがてぼくらはぞわめきとともに引き離され、お互に見ることもなく授業の教室に入った。

「おまえら、どうしたんだよ？ 仲よかつたんじゃないのか？」

矢野がこそそと横から詮索してきた。

「誰だつけ、あのミスグラランプリのせいなのか？ でも、なんでいまさらなんだ？」

「ほつといってくれ。この件だけは」

矢野は、ふうとため息をついて、授業に入つていった。

ぼくは、和尚がなんの抵抗もしなかつたことが、少し気がかりになっていた。

その日の放課後、ぼくは図書室で数式に手間取つて、夕暮れどきまで学校にいた。

そして、ようやく帰るひと、和尚のいるB組の教室を通りかけたときだった。

開いたドアから何気なく中を見ると、そこにただ一人、和尚がぽつんと後ろ向きで座つていたので、ぼくはびっくりしてしまった。

和尚の大きな背中は、薄暗い教室のなかで、丸く小さくなっている。ここまで落胆の色をにじませた彼を見るのは、ぼくは初めてだ

つた。

和尚は、こんな時間に誰かがここを通り過ぎるとせ、予測していなかつたに違ひない。彼の傍らには、一つに引き裂かれたなにかの紙があつた。ぼくは、なんだろうと思つて、少し角度を変えて様子を見た。

驚いたことに和尚は泣いていた。

あまりにびっくりして、ぼくは思わず、「おい和尚…」と声をかけかけた。

するとそのとき、和尚が「…つん」と声をあげた。彼は、誰かと電話で話をしていたのだ。

「結花とおれの子ども…欲しかった」

その言葉に、ぼくは一瞬息が止まった。

和尚は、自分の野心のためなら、すぐさま障害物を取り除くよくな男じやなかつたのか。

「ああ。結花がそう言つてゐるならそれで」

和尚は、ぼくがいることも気づかず、電話で話を続けていた。そして電話を終えると、上を向き、しばらく呆然としていた。そのあと、ふと気がついたように、引き裂いた紙を丸めて、ポンとバスケのショートのよつにごみ箱へ投げ入れた。ぼくは、そろそろ、ぼくの出番だらうと考えた。

「和尚。なにやつてんの」

和尚は、首を回して、ぼくをぼんやりと見た。

「ああ…、昨日は悪かつたな。話が出来なくて」「そんなことじやないよ。結花から話を聞いたよ」

「…ああ。わかつてゐる」

「これからどうするんだ? おまえ?」

「結花がもう、おれに会いたくなつて言つてゐる」

「えつ?」

「お別れだよ。こすれこつなることはわかつてた。遅かれ早かれ」

「じゃあ、子どもは…」

「愛子が結花と一緒に、病院に行くつてぞ」

「…それでいいのか、和尚？」

和尚は、いまにも泣きそうなまなざしで、ぼくを見た。

「おれは、おまえみたいにここの暖かい人間じゃない。自分のエゴだけで生きている男なんだ」

「そんなことはないだろ、和尚？」

「いや。そのものだ。おれは、いざれいなくなるのをわかっていて、結花に近づいた」

「和尚。あれは、結花の決断だったよ」

「何度もおまえに謝ろうとした。けど出来なかつた。すまん、翔」

「それより、結花をなんとかしてやれないのか」

「勝手な話だけど、彼女には、おれよりもふさわしい男がここにいると思つ」

「待てよ、おまえ、それでいいのか？」

「おれは、もう一度、自分自身について考え方直してみるよ」

「逃げるのか、和尚」

「そうだ」

そう言つて、和尚は荷物をまとめて、黙つて教室を出て行つた。

「おい、逃げるなよ。和尚。ぼくらは」

和尚が廊下で肩の向こうから、ぼくを見た。

「友だちだろ？ いつかまた、一緒に笑えるよな？」

和尚は、口元をぐつと噛みしめて、ぼくを睨んだ。

「たぶん」

そして、廊下を曲がつて消えていった。

ぼくは、自分に課せられた役割の大きさに、ただ呆然とするばかりだった。

そして、ふと気がついて、教室のごみ箱の中身をのぞいてみた。ごみ箱の中からは、子どもと大人の切り絵が、バラバラと夢のあ

第1-2話（遊園地）

ぼくは、『J』み箱から回収した切り絵を、セロテープでとめて自分の部屋に保管しておいた。

なんとなく、それが彼らの亡くなつた子どもへの供養になるような気がしたからだ。

「遊園地に行こうよ。3人で」

愛子から電話があつたのは、春休みに突入してすぐのことだった。「結花もこの頃、パツとしないしさ。翔ちゃんも勉強ばかりしてないで、行こう行こう」

ぼくは、3人で、といつところに、なにか愛子の策略めいたものを感じた。だが、ぼくには天からの配剤を拒否する『はまつたくなかった』。

「翔ちゃん。Jちゃん…」

駅前に着くと、愛子の明るい笑顔と、結花のおだやかな笑顔があつた。

結花はぼくと秋にドーナツ屋で会つてから、何回かメールをくれていたが、会つたのはそれ以来だつた。

「なにに乗る？」

愛子は、どうやら絶叫マシンを乗り回す『氣でこる』ようだつた。

「んー。ぼく、Jのこの苦手なのね」「結花は？」

「わたしもちょっと…」

「わかった。じゃ、一人で行つてくる…」

愛子は行列のなかに突つ込んでいった。あの様子じゃ、40分は待つことになるだろう。

「やつてくれるな、あいつ」とぼくはつゝ、つぶやいてしまつた。

「なにが？」と優しく結花が尋ねてくる。

「いや。それよりぼくらも、なにかべつの乗り物に行こうよ」

遊園地というものは、だいたい奇数人数で行くべきではないのだ。なにを乗るにしても、一人と一人の組み合わせになる。愛子は、このことも考慮してくれたと思われた。

ぼくは愛子に感謝して、結花と一人でコーヒー・カップのなかに座つて、くるくると踊つた。

結花は、ストレーントの長い髪をなびかせて、楽しそうにあたりを見回していた。

「ねえ。結花」

「うん？」

「だいぶ、元気出てきたみたいだね」

「うん。これも、翔ちゃんの励ましのおかげ」

「ぼく、ほんとに嬉しいのよ。結花の笑った顔が見れて」

「ふふふ。翔ちゃんが、へんな顔の写メくれたりするから、わたし、それ思い出して毎日笑つてたのよ」

「受けた？」

「受けた受けた。学校の友だちにも見せてまわつちやつた」

「あーーー！あれは結花限定だったのに」

「それならそうと、書いておいてくれないと」

結花はくすくす笑いながら、コーヒー・カップから軽やかな足取りで降りた。

「ああ、なんだか気持ちが吹つ切れた感じ」

ぼくは、結花のこころのなかから、和尚がどれだけ消えたのだろうと考へた。最高値を100%とすれば、いまは80%くらいか？

ぼくは、いまがチャンスだと正直思つた。

「ねえ、結花。そこのベンチでアイスクリームでも食べない？」

「そうね」

まだ肌寒い季節なのに、ぼくらはアイスクリームを一人でなめた。

ぼくのアイスはペパーミントチョコで、結花のは甘いストロベリー

ジャムだつた。

「ぼくらは、じゅりく黙つたまま、ベンチで行きかう人を眺めていた。

そのときぼくは、結花はぼくの言葉を待つてゐる、と思つた。

「ねえ、結花。ぼくらまた、やり直し出来ないかな？」

ぼくは勇気をふりしほって、言つた。

「え」

「まえみたいに付き合えないかなつてこと」

「翔ちゃん…」

「ぼく、結花のことがまだ好きだから」

「でも翔ちゃんは、こんなわたしでいいの？」

「ぼくには結花しかいないと思つてゐる」

「翔ちゃん…」

結花は、少し考えてから、ぼくの方を見てゆづくつと言つた。

「わたしも。優しい人がやつぱり好き」

ふんわりと、ぼくらの横で風船が一つ、飛び上がつていった。

「…ありがと。ぼくは全力できみをお守りしましょう」

観覧車で、ぼくが結花の手を引いて一人で乗ると、愛子がそのあとから乗り込んできて、満足げな笑みを浮べた。

「いい夕日ね~」

愛子は「ココ」しながら、暮れゆくレジャーパークの風景を背景に、ぼくら一人に言つた。

ぼくは、愛子をじつと見て、結花にわからなにように小さく親指を立てた。

愛子は、ますますにっこりした。

結花とぼくの一人は、その後、並んで外をゆづくつ見た。

ぼくはそつと、結花の手を握つた。

第1-3話（ぼくと結花の第2章）

遊園地でじじいを会わせてから、結花とぼくは、お互いの家を行き来するようになった。

結花の母親は、ぼくに「いつも勉強を教えてくださつてありがとうございます」と感謝してくれていた。

「いいのかな。あんなに感謝されで」

「だつて、ほんとうにやつてることは勉強なんだもん」

「たまにはじうこつこともあるけどね」

ぼくは、机を乗り出して、彼女に軽くキスをした。

まえに付き合っていたときから、ときどきしていた儀式のようなキスだった。

結花は、くすくす笑った。

「ちょっと。なんで笑うの？」

「だつて、翔ちゃんのキスつて優しすぎるんだもん」

「じゃあ、どうじうのがいいのよ」

ぼくは憤然として言った。

「そうね……」

結花はじつとぼくを見ていた。

ぼくが、その大人びた表情にドキッとしていると、結花は、立ち上がつてぼくの横にちょこんと座つた。

そして、ぼくの唇に自分の唇をつけると、ぼくの中に舌をそつと入れてきた。

ぼくはただ彼女に身をまかせていた。

「……すげえ……甘い」

唇を離したあとで、ぼくは魔法にかけられたみたいに固まつていた。

「ふふふ。ケーキのせいかな？」

「いや、そんなんぢやない」

ぼくはそれを確かめるために、結花をぼくの方へ引き寄せて、もう一度彼女に口づけた。

今度は、ぼくが彼女のなかに入る番だつた。そうしているうちに、ぼくはだんだん、自分のなにかが抑えきれなくなつてきた。

「いいの？ぼくをそんなに挑発しちゃつて」

「挑発してる？」

「まえにも言つたけど、ぼくも男なのよ？」

「あのときは、まだわたしも子どもだったから。…傷つけちゃつて『めんね』

誰に大人にされたんだよ、とぼくは一人の男を思い出して、猛烈な嫉妬心が湧いてきた。

「結花をぼくのものにしたい」

「…うん」

「結花は、それでいいの？」

「翔ちゃん。わたしは翔ちゃんの優しいところが好きだけど」

結花はちょっとと言いにくそうに目をそらした。

「たまには、強いところも見せてほしいなつて…思ひ」

ぼくは、急に緊張して、ドキドキと心臓を波打たせた。

結花を抱きしめて、ぼくのものにしたい！それは、ぼくのなかに確実にある欲求だった。そして、何度も自分のなかで夢想してきたシーンでもあつた。

結花は、じつとぼくを待つていた。

ぼくは決心して、彼女を優しく押し倒した。

それからあとは、無我夢中だった。

「…家の人にはづかれないので」

「今日、誰もいないよ」

結花の言葉に力づけられて、ぼくは彼女を強く抱きしめる。

結花は、柔らかくぼくを迎えてくれた。
夕暮れどきの西日が、ぼくらを優しく包む。
そして、ぼくは結花を愛する一人の男になった。

第14話（進路）

春休みが終わり、3年になると、ぼくと和尚はまた同じクラスになってしまった。

そして、1年のときと同じように、ぼくらはまた出席番号の最後の2人となつた。

最初に決められた席が前後なので、ぼくらは無視し合つわけにもいかなかつた。

「和尚。おまえ、理系なの？」

ぼくが選んだこのクラスは、ほとんどが男子の理系だった。

「おれは、むしろ多様なことが出来た方がいいんだよ。文系も理系もない」

アメリカの大学は、文系だの理系だのどちらかが出来ればいい、そして勉強だけが出来ればいいというものではないらしい。

そういうわけで、和尚は大学で経済学を学ぼうとしていたが、理系クラスにて、バスケだの障害者ボランティアだのにも興じていた。

「冥王星人と仲直りしたのか。よかつたな」と矢野が休み時間に、ぼくに話しかけてきた。

「それを言うなら、海王星人だろ」

「そつか。冥王星は惑星から外されたんだった」

矢野は、へんに理解して、うなずいた。

「仲直りっていうか…、あいつ、これでいいのかな」

「ん? どういうこと?」

「じつは、ミスグラランプリが帰ってきたのよ。ぼくのところへ」

「ええ――あの海王星人をふる女がいるのか!」

矢野のレスポンスはいつも的外れだった。

「ぼくが、彼女をやつにとられたときは、ショックで話す氣にもな

れなかつたけど

「うん」

「和尚は平然と話しかけてくる。あいつ、ほんとに海王星人なんじやないかな」

もし、ぼくに対する和尚の態度が忍耐によるものならば、それは相当強靭な精神力が必要だと思われた。

「翔ちゃん、普通の国立大学へ行くんだ?」

桜の花びらをあたまにひとひら乗せた結花が、ブランコに乗ったまま言った。

桜が満開になつて散り始めると、ぼくと結花は近所の公園へ行つた。

中学生のころから、二人が遊んでいた小さな公園。結花が、ジーンズの後ろを汚しながらすべつていたすべり台は、もうぼくらには無縁になつていた。

「うん。パイロットになるには、大学で2年間基礎学問をやって、それから航空大学校に編入するのが早道だからね」

「ふうん…。パイロットになるつて、本気だったのね」

「なんだか、子どもの夢みたいに思われるけど、ぼくは初めてからのつもりだつたよ」

ぼくは、結花に微笑みかけた。

「それで、結花は?」

「え?」

「結花は、進路どうするの?」

結花は、ちょっとうろたえた様子を見せた。

「進路…つていつも、具体的になにも考えてないのよね。…どうしようかなあ」

「グラビアアイドルになるとか?」

「さあ。なんか、雑誌社の人は熱心に勧めてくれてるみたいだけど」「はやくしないと、年をとるぞ」

「ひどい〜」

結花は笑顔で言つたが、上口にはなにかに奪われているみたいだつた。

彼女の瞳が動搖しているのを、ぼくはわけもわからずじつと見ていた。

「とりあえず、うちはエスカレーターな高校だから、翔ちゃんみたいにガツガツ勉強しなくてもいいのよ」

「そういうものなの?」

「そういうもののなの」

でも、ぼくはなんだか釈然としなかった。

結花の、ほんとうの夢は、いったいどこにあるんだり?~

第1-5話（テジャウ）

結花の制服が夏服に変わり、本格的な夏がやって来ると、ぼくら受験生は、もうまったく遊ぶ余裕なんてなくなってきた。

ひたすら、学校、予備校、自習、就寝…、たまに息抜きのデーター。でもぼくは、通学は必ず結花と一緒にすることにしていた。

「おはよう、翔ちゃん」

結花の白い腕が、朝日に照らされてぴかぴかしている。

「おとせだけが、ぼくの一日のうちでいちばん幸せなひとときだつた。

ある日、ぼくらは、途中の駅で乗ってきた和尚とぼくたち出くわしてしまった。

和尚は、混雑した電車のなかでひとり立つ、そしてぐいぐいと人並みに押されて、ぼくらの間近にまで来てしまった。

「おはよ

彼は、どちらでもなく挨拶した。

「おはよ、和尚」

ぼくは挨拶を返したが、結花は小さくうなずいただけだった。

ぼくは、気まずい雰囲気を打破するために、なにか話題を探そうとした。だが、そんなことは和尚が先にやつてくれた。

「翔。こないだ、視力検査したんだって？」

「ああ。両眼とも1・2。ぼくつて、パイロットになるために生まれてきたんじゃないのかなあ」

「『月刊Hアーライン』読ませてもらつたよ。このまえ、おまえが机の上に置きっぱなしにしてたやつ」

「ああ、面白いだろ？ もう時代はジャンボじゃないけど、ぼくはそれが好きなんだ」

「ボーリング787の出来つてどうなんだろうな。コストパフォ

マンスがいいのは感心だけど」「

ぼくらは申し合わせたように、男同士の会話をした。

結花は取り残されて、満員電車のなかで、じつと身をひそめていた。

電車がキーッと急ブレーキで次の駅で止まつたとき、ぼくはふと結花は大丈夫かと思つて隣を見た。

すると、彼女の視線は、ぼくではなく和尚の方にあつた。

ぼくは、とても嫌な予感がした。……いつか、同じような光景を見たことがある……。

あれは、初めて結花と和尚が出会つた、海水浴の帰りの電車のことだつた。

結花は、和尚がはしゃいでいる姿に、釘付けになつて見ていたのだ。

「もしかしたら……」といつ不安を抑えて、ぼくはその後もひたすら和尚と男の会話を続けた。

和尚も、ぼくの意見に賛成のようだつた。

結花が乗り換えるために電車を降りたとき、ぼくは安堵のため息をついた。そして、演技を終えた一人は、しばらく黙り込んだ。

「翔」

和尚がまもなく口を開いた。

「ん?」

「彼女といつまくやれよ」

「ああ」

和尚は、まっすぐ窓の方を見て言つた。

ぼくは、和尚が、結花を忘れたのではなく、強靭な精神力によつて想いを封じ込めている方だと確信した。

ぼくは、窓の風景を見ながら思つた。

でも和尚 、

今度ばかりは、結花をおまえに渡すわけにはいかない。
ぼくらの卒業は、あと半年余りに迫っていた。

そのあと、和尚はアメリカへ旅立つしていくのだ。

第1-6話（結花のゆめ）

和尚と電車で出会つてからも、結花は一見なんの変わりも見せなかつた。

相変わらず、翔ちゃん、翔ちゃんと言つて、ぼくについて來た。でもぼくは、なんとなくそのはしゃぎぶりに、違和感みたいなものを感じていた。

彼女は、まだ迷つているんじゃないだらうか？ 和尚のことを忘れて、ぼくを選んだことを。

そんなとき、ぼくは結花の部屋で、旅行のパンフレットを書棚のなかに見つけてしまつた。

巧妙に隠してあつたが、ぼくには、これは最近引き抜かれたものだということが、すぐにわかつた。

『アメリカ・ボストンへの旅』

ぼくは、しばらく呆然と、その明るい表紙を眺めていた。
結花は…、こんなものを見て、いつたいどうする気なんだらう。
ぼくは、ときどき、胸が張り裂けそうな気持ちで彼女で見ることがあつた。

結花はまるで、トライアングルの一角をさまよう子羊だった。

ぼくは、きみを幸せにしてあげたい。

でも、きみは、ぼくじゃ駄目なの？

ぼくは、ベッドで寝てゐるふりをして、彼女の幸せそうな寝顔を見ていた。そして、少しだけ泣いた。

ぼくだって、Hゴの塊だよ、和尚…。

自分の欲求のためなら、大好きな彼女があまえを想つても、力づくで奪い取る。

いずれ、おまえはいなくなるんだ。

いまは、ぼくに彼女を引き止めさせてくれ。

でも、ぼくには結花について、どうしても気がかりなことがあった。それは、進路のことだった。

街のあちこちで受験生があふれ出し、本屋が参考書でいっぱいになる時期が来ても、彼女はそれを決めようとしなかった。

「もう間に合わないよ？」

ぼくは、あのパンフレットを見てから、何度も結花に忠告した。「いいの。お父さんもお母さんも、自分のやりたいことが決まってから、決めればいいって言つてくれてるから」

「少し、呑気すぎやしないか？」

「翔ちゃん。お願ひだからもう、そのことは口に出さないで」

結花はその口珍しく、強い口調でぴしゃりと言つた。

ぼくは、自分を拒否されたようで、なんだか癪にさわった。「なんだかへんだな。結花つて」

「へんつてなによ？」

「…ほんとば、田馬の王子さまが迎えに来るのを待つてるんじゃないの？」

「…翔ちゃん？！なに言つてるの？」

「ぼくよりも、誰かのことを考えていることがある」

「なんで？！そんなこと言つの？」

「じゃあ、これ、なんだよ？！」

ぼくはすばやく結花の書棚のところへ行って、『アメリカ・ボストンへの旅』のパンフレットを抜き出してみせた。

「ぼくがなにも知らないとも思つてた？」

「翔ちゃん…、ひどい。こんな、勝手に…」

「それよりどういうことだよ。結花、おまえ、和尚について行く気じゃないだろうな？」

結花が震えて泣き始めた。

「……どんなところか見てみたかっただけなの。ほんとにそれだけ。行こうだなんて思つてない」

ぼくは、ひどくショックを受けた。

やつぱりそうか。結花は、まだ和尚に未練を持つているんだ。

ぼくはいたまれなくなつて、思わず部屋を出て行こうとした。

「待つて！」と結花が言つた。

「翔ちゃんのことが好きなのはほんとな。でも、まだわたし、和尚との赤ちゃんのことも引きずつていて……」

ぼくは、息をのんだ。

赤ちゃん…赤ちゃんか…。

ぼくは、また敗北感を味わつた。同じだ…、あのときと同じだ…。

でも、ぼくはあのときほど、弱い男でもなかつた。

「和尚は赤ちゃんを授けてくれたかも知れないけど」

ぼくは冷たく震える声で言つた。

「こまの、きみの彼氏はぼくだから。和尚はきみのところへもつ、帰つてはこないよ」

「…わかってる」

「わかつていればいいんだ」

ぼくは、結花を優しく抱きとめた。結花は、やや身体を固くして、いた。

「これからもいろいろあるとゆうナビ、ぼくは結花とずっと一緒に生きていきたい」

「…つん」

「結花が進路を決めないならそれでいい。弋となれば、ぼくがきみを養う」

「え」

結花が一瞬、小声をあげた。ぼくは急いで、冗談っぽく言つた。

「赤ちゃんが欲しいなら、ぼくが産ませてやるよ」

結花はくすりと笑って、ありがと寂しく言つた。

結論的に、ぼくはぼくなりの道をしつかり歩むしかなかつた。

ぼくは、いつも和尚と自分を比べてきた。けれど、もう、そういう時期は終わりに近づいている。

ぼくら進学組は、受験のラストスパートに入った。矢野も愛子も、みんな必死で、会えば試験の話しかしなかつた。

「どうやら、上手くいったみたいよ」

センター試験の終わった翌日、愛子は電話をかけてきて、ほつとした口調で言つた。

「もうおれは駄目だ~~~~~！」

矢野に電話をかけてみると、彼は電話の向こうでオーバーアクションしていた。

「そんで、おまえはどうだった、翔？！」

「うん。なんとかいけそうよ」

ぼくは、自分と結花との未来を信じて、ひたすら前へ走るしかなかつた。

結花との未来を信じて。

第17話（卒業）

長かつた受験がようやく終わった。

ぼくらは、とりあえず全員、進路が決まった。

ぼくは、地元の国立大学の工学部に進学することになった。ただし、予定ではこれから先2年で、航空大학교に編入になる。

卒業式の日、ぼくらのクラスは、アメリカの大学生がやるのを真似して、帽子のかわりに上履きを投げた。

ばたばたと上履きが上から落ちてきて、それはもう悲惨な騒ぎだつた。

和尚が、笑いながらぼくの上履きを放り投げてくる。

「バカだよな。おれら」

「見ていて気持ちいいくらいにな」

「ところで、和尚はどうすんの。入学は9月だろ？」

「ああ。今週末に向こうに行こうことにしたよ」

「ええっ？！」

あまりの急さに、ぼくは驚きの声をあげた。

「そつか…、ぼくはまだ、じつにいるのかと思つてた

「日本についても仕方ないだろ」

「じゃあ…、」

もう、和尚とは会えなくなるのか。

ぼくは、突然、彼と出会つてから、いろいろあつた高校時代を思い起こして、きゅっと胸が痛くなつた。

「和尚。便はいつ？」

「土曜日の14：35発のノースウエストだよ。途中、デトロイトで乗り換えて、それからボストンに住んでる叔母さんの家に行く」

「よいよ、ほんとうの別れのときが来たのか。

「…見送りに行くよ」

「ありがと。おまえの好意は忘れないよ」と和尚は素直に笑った。

「結局、おまえは“USA！”を叫ぶ側へまわつたってことだな」

「まあそりゃうことだ」

和尚は、一年のとき、初めてぼくらが交わした会話を忘れてはいなかつた。

和尚との別れの日、ぼくは着古したジーンズにジャケットを羽織つて、早めに出かけようとしていた。

そのとき、キンロンと玄関の鐘が鳴つた。母が、「あらまあ」と声を上げる。

部屋に入つてきたのは、結花だつた。

「あれ? どうして來たの?」

「ううん、なんとなく。翔ちゃんの顔が見たくなつて」

「ああ……でも悪いな。今日はちょっと出かけないと」「ぼくは、結花に、和尚の旅立ちを教えていなかつた。

「翔ちゃん、いつもと雰囲気違つね」

「ああ、ジャケットのせいかな? いつもは破れたダウンだからな」「ふうん」と言つて、結花はそのへんのものをちらちらと見ていた。

「どうしたの。落ち着きがないね」

「だつて。翔ちゃんがどこへ行くのか気になつて」

「今日は一緒に行けないよ」

「どうして? どこへ行くのかだけでも教えて?」

そこへ、母が紅茶とケーキを持って、部屋に入つてきた。

「結花ちゃん、食べていつてね。このケーキ、頂き物だけです!」「く

美味しいのよ」

結花ははい、と言いながらも、床に座つとしなかつた。

ぼくはそのとき、なんとなく結花は、今日が和尚との別れの日だ

と知つてこるんぢやないかといつ氣がした。

でも、もうきみは遅かった。いまさら、びりする」ともぢやしない。

「じゃあ言ひけど」

「うん」

「成田空港だよ」

「え?」

「今日、和尚がアメリカへ行くの」

「……………そうなの……」

「結花。きみはケーキを食べたら、自分の家で待つてくれないか。

帰りに寄るよ」

そう言つて、ぼくはそつと部屋を出た。

そのあと、結花が、和尚が泣きながらつづった、大人と子供もの切り絵を発見することも予想せずに。

第1-8話（空港での別れ）

『アジアアナ航空102便は、ただいまソウルから到着しました。』

空港は、思つたほど混雑していなかつた。

和尚の見送りには、愛子も来ていた。ぼくは愛子に、「おまえ、裏切つたな」とこつそつ言つた。

「なにを？わたしが？？」

「結花に、この日を教えただろ？」「

「だつて話に出たから。翔ちゃんと一緒にいくから、そのとき一緒にお茶でもしようねつて」

「ぼくが？？結花と愛子と？？」

「ちがうの？」

「ぼくは、結花が和尚の出発の日を、自分から知りたがつたことこの胸がざわついた。

「あつ、知り合いがいるー翔ちゃん、ちょっと和尚に伝えてて」

愛子が飛び跳ねて、数メートル離れた場所へ行つたとき、和尚がツイードのジャケットに、肩からデイバッグをかけて、出発ロビーのまえに現れた。

ぼくは、彼を真正面に迎え入れた。

「いよいよだな」

「まあな。やつとこれからつて気もするけどな」

「愛子、あつちで知り合いとしゃべつてるぜ」

「相変わらず、変わつたやつだな。…まあ、またそのうち会えるでしょ、ぼくは思った。そのうちなんて、別れの言葉と同じだと。空港のアナウンスが流れた。

『ノースウェスト航空12便デトロイト行きは、ただいま最終の出発案内をしております。…お急ぎ手荷物検査場へお越し下さい。』

そのとき、「ゆかあ～！」という愛子の声が聞こえた。
ぼくと和尚は、同時に愛子の視線の先を追った。

そこには、結花がいた。

彼女は、小さな荷物とともに、あの切り絵を握りしめていた。
「和尚……」

ぼくはいけない、と思った。結花が、和尚に連れ去られていく。
和尚が動搖したのが受け取れた。

やがて、彼と結花との距離が接近し、和尚は、デイバッグを肩から外した。

彼らは、一瞬きゅっと抱きしめ合つた。

だが、和尚はすぐデイバッグを手にとつて、後ろを向いて手荷物検査場へ大股で歩いていった。

「和尚！」

結花が叫ぶ。

「わたし、チケット持つてるのよ！」

和尚が一瞬、振り返つて凍りつく。

ぼくは、もう駄目だと思った。

「来るな！」

その瞬間、なぜかぼくの手は、結花の背中を押していた。

「行け！」

不審に思った警備員が、結花に近づいていく。

和尚は、彼女の手をとつて、警備員になんでもないんだ、というふうに伝えた。

そして、ぼくを振り返りながら、2人は出発ロビーのなかへ消えていった。

「さよなら。結花、和尚

これが青春の1ページってやつですか。

ぼくはもう、50ページはめくつてしまつたような気がする。これ以上はない。

結花と、和尚と、ぼくの青春物語は終わってしまった。

ぼくのやばこ、愛子がやって来る。

「あれ？ 結花は？ どこへ行ったの？」

ぼくは、その質問には答えられない。

涙で、なにも答えることが出来なかつた。

第1-8話（空港での別れ）（後書き）

「次回、ヒローグに続きます。」

HΠローグ

いくつもの年月が過ぎ、ぼくは念願のパイロットになつた。まだ年齢的には副操縦士だが、やがて機長になる日も近いだろ。愛子は、新聞記者になつて、地方を飛び回っているらしい。いまは、年賀状をやり取りするくらいの関係だ。

ある日、ぼくが二コーコークの一角にあるバーに入ると、驚いたことに、そこに和尚がいた。

「……元気かよ？！」

ぼくらは、再会を喜び合つて、乾杯した。

彼は、ウォール街の辣腕証券アナリストになつていた。

「いろいろあつたけど、ぼくもいま一人の子持ちだよ」とぼくは言った。

「おれも」

「まさか空港で別れてから、おまえからあんなサプライズをもらえるとは思つてもみなかつたよ」

「ああ。あのときな」

「おまえが、結花を日本に帰したんだろ？」

「そうだ。結花にとつて、どう考へても海外生活は重荷だったからな。デトロイト空港で説得して、すぐ成田への直行便に乗つてもらった

「つた」

「いっぱい泣いたか？」

「ああ」

「ぼくはビールを一杯頼んで、やつに一杯おじつてやつた。

「彼女のその後、知りたい？」

和尚はぼくの顔をX線ビームでじつと見て、そこになにかを見つけたようだつた。

「聞かなくてもわかつたよ」

ニヤリと笑う和尚の顔に、ぼくは、懐かしい高校時代を見た。
ぼくらは、どちらからともなく、互いの子どもの写真を見せて自慢し合つた。

ぼくと結花のあいだに出来た子どもは、一人とも彼女似の超美人だった。

(ア)

H&Rローグ（後書き）

「最後まで読んでくださった方々、ほんとうにありがとうございました」という言葉をこま
した。ぺこり。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6379d/>

トライアングル・LOVE

2010年10月8日15時46分発行